



「餌屋のつぶやき。その違い、ご存知ですか？」

ちょっと聞いてよ!

JA西日本くみあい飼料株式会社広島営業所 獣医師 中尾 継幸(なかお つぐゆき)氏

先日、テレビの情報番組で「ドッグフードとキャットフードの違い」といった話題を取り上げていました。

解説によると基本的に両者に大差は無いものの、猫には特有の栄養代謝が存在するため、食物として必要な栄養素が異なるそうです。例えば猫は体内でタウリンという必須アミノ酸が合成できないため、

キャットフードにはタウリンが必ず含まれていますが、犬は体内合成できるためドッグフードには含まれず、そのため猫にドッグフードを与え続けると栄養障害が発生し、タウリン欠乏にて夜盲症を引き起こすのだからです。

この番組を見るうちに、「カウ・フード」、つまり牛の食物である配合飼料における「違い」が頭を過りました。乳牛には「泌乳期」と「乾乳期」という、犬と猫の差に匹敵する？生理的に大きく異なるステージが存在します。



両者の栄養面での主たる差は、乾物摂取量とエネルギーや蛋白等の濃度ですが、更に乾乳期ではミネラル代謝の観点からカルシウム量や塩分・カリウム濃度の抑制を必要とする点でも異なります。よって、乳牛用の配合飼料ではそのような部分を考慮し、泌乳期用と乾乳期用として各々設計されているのです。

一方、酪農家さんでは乾乳牛に対しても泌乳期用の配合飼料で対応している例が見られます。その場合、給与量を二・五kgに抑えて乾物量とエネルギーや蛋白濃度を乾乳期の推奨値

に合うように調整され、それにて結果的に乾乳期では制限すべき塩分やカルシウム濃度も抑制できるため、特に不具合を感じないようですが、実はそこに意外な盲点があります。それは「ビタミン含量」です。飼養標準「NRC 2001」では、生体維持に必要なビ

タミンA・D・Eに関して、一日の必要量は乾乳牛も泌乳牛と同水準としています。よって、例えば一日十kg程度の給与にて充足することを前提に設計された泌乳期用配合飼料を、乾乳牛に量を抑えて給与すると、ビタミンが不足する事態が生じます。

最近、乾乳牛の血中ビタミン値が低レベルを示す農場が散見されるようですが、このような状況が背景にあるのかもしれない。乾乳期のビタミン不足は分娩後の免疫力低下や繁殖悪化を誘発します。乾乳牛に泌乳期用配合飼料を与える場合には、ビタミンの別添加を検討しなければなりません。

冒頭のキャットフードとドッグフードでは、両種間での必要栄養素が異なることから、そのフードが犬用か猫用かを明確に表示する義務があるそうです。

乾乳牛と泌乳牛への配合飼料は、表示票における対象家畜等が「乳牛用」という括りにおいて、共用することに規則上問題は無いものの、乾乳牛に泌乳期用飼料を与えるような場合では、使用する飼料の内容や成分を理解し、過不足が起らないよう極力注意を払うことが必要なのです。